



〈中国学 わたしの一冊〉 いくつかの本

萩野, 脩二

(Citation)

未名, 31:71-83

(Issue Date)

2013-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481814>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481814>



〈中国学 わたしの一冊〉

いくつかの本

萩野 脩 二

与えられた題がなんであったか、よく覚えていないが、どうも「中国学 わたしの一冊」とかいいうものであったような気がする。もしこの題が動かないならば、私は到底お引き受けすることはなかった。ただ、具体例として大の川合康三先生の文章「十代の読書」が付されていたので、川合先生に習って、これまでの読書遍歴みたいなものを書いて、責めを塞ごうと思った。とはいえ「読書遍歴」などという大それたことを書くことには抵抗がある。というのも、私は人様にお知らせするような読書体験も知見もないからである。でも、そういう言い訳をゴタゴタ並べていると、実に不愉快な思いを人に与えるであろう。一、二度のメールのやり取りで、承諾した以上、潔く自分の過ぎ来し方を振り返ろう。

但し、私は二〇一二(平成二四)年三月に関西大学を退職した。退職に際して、研究室にあった書籍などを整理しなければならなくなったので、大慌てで持っていた本を処分してしまった。それで、今振り返ってみると、あの時読んだ書籍や雑誌などが、手元がない。家に運んだダンボールをひっくり返しても出てこないものが多い。どうでも良い役立たずの本などは、いつまでも本棚にデンと座っているのに、肝心の本の方が却って見つからない。多くを記憶に頼って書くしかないので、とんだ記憶違いがあるかもしれない。このことを前もってお断りしておこう。

私が東京の私立高校を卒業して京都大学文学部を志望したのにはいろんな事情があるのだが、大学に入ってから

は、なぜ京大文学部を選んだのかという質問に対して、私は格好よく、吉川先生の本を読んだからだと言うことになっている。それは、高校三年の受験間際の一九六〇(昭和三五)年の二月一日であった。自分のメモには「病床」と書いてあるから、大事な受験の間際に例によって風邪でも引いていたのだろう。当時、国立一期校の受験日は三月五日からであった。

正確には、吉川幸次郎『論語』上(中国古典選、朝日新聞社、一九五九(昭和三四)年三月一五日発行、三三八頁)を読み終え、後ろの奥付の上に「監修者の言葉」が載っていて、それを読んだことが、私に影響を与えたのである。本来の、論語の解説が素晴らしいとか、詳細であるといったような感想ではなく、「監修者の言葉」という四〇〇字少しの言葉に感銘を受けたのである。ということは、本当に格好が良いのか、恥ずかしいことなのかわからないが、とにかく、古典に対してこんなことを言う人がいるのか、素晴らしいではないかと思つたことは確かである。一七、一八歳の年頃には何かヒロイックな感情が潜んでいて、普段は引つ込み思案な私にしても、そういう感情に火をつけられたに違いない。ちなみに、下巻が出たのは、一九六三(昭和三八)年七月二五日のことで、もう私は大学に入っていた。

今、少々長くなるが、全文を引用したい。

古典、すなわち古代のすぐれた直観にのみよつて吐かれた不変の言葉、そうして永遠に人生の知恵であり得る言葉、それを記載した書物は中国にばかりあるのではない。

しかし中国がそのいくつかをもつことは、たしかである。それらは中国の隣国である日本人の、久しきにわたる読書でもあった。

それがややしばらく忘れられていたのは、それらを独占しようとする狭量な人々が、恣意のかきねを、古典と

われわれの間に作っていたためである。

われわれは、古典を、われわれの手にとりもどそう。

そのためにこの叢書を編む。

中国の古典といえば、論語、孟子、荘子、史記、唐詩、唐宋八家文、それらが一級品である。またそれらはみなやさしい表現の書物である。この叢書には、それだけを収める。それらは人人の必ず読んでよい書物である。むづかしい表現の書物、読んでも読まなくてもよい書物は、しばらくここに収めない。

吉川幸次郎

以上が引用であるが、今読み返しても優れた文章であろう。何かと闘う時の人の気合というものを感ずるではないか。余計なことを排除して、一点に集中して進む気概なるものが、きつと貧相で弱い（よくデスペレイトすると言われた）私にも伝わったのだと思う。

そういうことから、吉川先生の言葉に感激して京大に入ったのだということを、他人に吐く言葉として、志望の理由にしていた。私は人がいぶかしがる「都落ち」して東京から京都にやってきた。でも、私は特別に中国の古典をやろうとしたわけではなかったのだ、ただのんびんだらりと大学時代を過ごした。親元から離れ、親戚一人いない地での自由さを謳歌していたと言ったら良いだろう。そして、瞬く間に過ぎた四年目には、将来どうするかを自分で決めねばならなかった。当然就職するつもりであった。が、見事に、受けた会社は全部落ちた。ちょうど日本経済が高度経済成長でバブルに向かうところであり、一般的には「売り手市場」で、就職しやすい時であったというのに、私は落ちた。仕方なく学内浪人して、次の年を目指した。しかし、怠惰な者に運や実力が急につくわけはなく、翌年も目指したところは落ちた。流石に意気消沈して中文の研究室に行ったところ、吉川先生がたまたまそこにいらっしやった。それで私は言った。「就職試験に落ちたので、大学院にゆきます」と。すると、吉川先生は

あの大きな目を剥いて、「きみツ、大学院だつて試験があるよツ」とおっしゃった。私はすぐさま、「ええ、わかっています」と言つたけれど、この時初めて、吉川先生からモノを教わつた気がした。こんな当たり前のやり取りであるが、先生から生の声を聞き、生きた息吹を感じ取つたのであつた。この実感が私の抛り所としていつまでも残つた。

のちのことになるが、私は一九八〇(昭和五五)年四月から一九八二(昭和五七)年三月まで日本語教師(専家と言われた)として中国北京にいたことがあるが、そこで得た収穫は、結局のところ私自身の実感がリアリティを持つということだつた。以後、私は実感主義を貫いていて、理念のきれいごとを信じない。

話を戻すと、怠惰な私は中国の古典文学を選ばず、現代文学を卒論に選んだ。早い話が、訳本もあつて楽に見えたからである。古典だつて訳本があるが、どうも七難しい前段階の訓練が必要だ。そういう世界に入り込むよりも、時代の流れに添えるような動きに興味があつたと言えるだろう。当時中華人民共和国は革命中国として輝かしい時代背景と未来へ向けての希望の道を歩んでいた。少なくとも、そういう国として自他共に認められていた。中華人民共和国とは、社会の低層の人々(≡人民)が世の中をひっくり返して、主人公となる社会を作り上げた社会主義の国家であつた。だから、社会主義の国家の文学(≡人民文学)とはどんなものであるのか。注目を集めていた。そういう雰囲気の中、趙樹理という作家がいて、新しい社会主義の作家だともてはやされていた。人民作家だ。どんな作家なのか私もひとつ読んでみようと思ひ、『李家荘の変遷』という長編小説を読んでみた。

これは、最初日本語訳で読んだ。趙樹理作、小野忍訳『李家荘の変遷』(一九六〇(昭和三五)年三月三〇日第二刷印刷、岩波文庫、二八四頁)。今、手元にあるメモによれば、私は、一九六二(昭和三七)年六月一〇日に京都岡崎の下宿で読み終わったことになっている。主人公・鉄鎖とか、地主・李如珍、その腰巾着・小毛、オルガナイザ

一の小常などの人物が醸し出す、李家莊(りかむら)に私はとりつかれた。鉄鎖の村から太原、太原からふる里への移動に伴って繰り広げられる視野の拡大と時代の変化に私は圧倒された。革命というものが一筋縄でなく、幾度かの挫折を経て、やっと希望が見えてくる物語を、私は事実の再現のようにして、感動して読み終わった。私は今でも、このような読みに異論はない。悲惨な話があっても、希望に裏打ちされたロマンを感じ取ったと言って良いだろう。私は趙樹理という作家が好きになった。

そこで、中国語の原文ではどうかと、原文を読むことにした。趙樹理著『李家莊的变迁』(人民文学出版社、一九六二年四月北京第一〇次印刷、一二一頁)を読み終わったのはどうやら、一九六三(昭和三八)年十一月一二日のことであつたようだ。その頃であつたと思うが(正確には、一九六三年七月)、私は古本屋で一冊の雑誌を見つけた。それは、一九五三(昭和二八)年九月号の岩波書店の『文学』という雑誌であつた。「中国文学と日本文学」という特集が行なわれていて、洲之内徹「趙樹理の世界」とか、岡崎俊夫「中国作家と日本」などと並んで、竹内好の「趙樹理文学の新しさ」が載っていたのだ。竹内好の文章の中では、『李家莊の变迁』についてのある感想文が紹介されていた。書いたのは九大国文科の岡本庸子氏であつて、それを竹内好が引用したのだった。竹内好が九大で集中講義をした時のレポートという。この感想は、小説が主人公・鉄鎖の成長を背景とともに描いていることを指摘し、個人が全体に吸収されていくさまに優秀さを見出していた。のちに、京大に集中講義にいらつしやつた小野忍先生が私に語つた意見では、それはヘーゲル哲学の下敷きのもとにあるとのことであつたが、岡本氏のレポートは世を驚かす優れたものであつた。

私は、趙樹理に興味を持ったが、『李家莊的变迁』を卒論のテーマとするわけにはいかないと思つた。すでに優れたレポートがあつて、それ以上のモノを私が書けなかつたからだ。但し、趙樹理という作家についていささか調

べてみる気になり、ジャック・ベルデンの『中国は世界を揺るがす』上中下（青木文庫、安藤次郎・陸井三郎・前芝誠一共訳、一九六五（昭和四〇）年六月、七月、八月）に出てくる「乞食作家」を調べる気になった。趙樹理を世界で初めて紹介したベルデンは、この本の第四章一七で「ある乞食作家」として紹介している。ベルデンは、趙樹理の作品も訳しているが（*Rhymes of Li Yu-tsai and Other Stories*, 一九五〇）、こんなふうにするのだ。

「私は趙の作品を三冊翻訳している。…（中略）…あけすけに言うと、わたしは趙の書物には失望を感じた。翻訳されるならば、世評はかれを世界的にも指導的な文学者の一人にするだろうという評判をかかされていたが、わたしは賛成するわけにはいかない。かれの書物にはまったく宣伝らしいものが見当たらなかった。共產党の話など一つも見当たらなかった。村の生活の描写には人をひきつける力があり、そのユーモアにはピリツとした味があり、韻文はきわめて独創的で、なかなか味のある人物が描かれているが、筋はごく大ざっぱで、人物はしばしば名前がついているだけでむき出しの類型にすぎず、何の個性ももたず、一人として十分に展開されている人物がなかった。何よりもいけないことは、趙の物語は事件の輪郭といったものだけで、現実を感じられた情緒を扱っていないことであった。わたしが自分の経験から見つけた中国の農村全体を湧き立たせている深い情熱は、かれの書物の何処にも記録されていなかった。」（上、一六六頁。安藤訳）

私は、この指摘は大変優れていると思った。趙樹理の文学の特徴をよく捉えていて、これ以上の贅言は必要ないように思った。がしかし、これはあまりにも欧米的な文学観に偏った評価だと思った。これでは趙樹理の中国文学における時代的な新しさを捉えられないと思った。ベルデンの言う「ユーモア」をもう少し考えてみても良いのではないかと思った。

それはともかく、ベルデンの原本ではどうであろうか、一応調べてみた。ジャック・ベルデンの原本を探してみ

ると、京大経済学部及び法学部の閲覧室にあったので、必要なところを筆記した(Jack Beiden, *China Shakes the World*, London iv, Gollonoz, 一九五〇, c一九四九)。当時はまだコピー機などがなく、借り出して筆写するほかなかったのだ。万年筆を使ってはいけない、インクが飛ぶから……などの注意を守りながら、筆写するのは「しんどい」作業であったが、でも楽しい作業でもあった(この時筆写したメモが、今どうしても見つけられない)。私は、趙樹理の年譜と作品表を作ることに専念し、日本で言及された趙樹理の評論を集めた。しかし、日本で中国の作家の履歴を調べることに資料面で限界がある。この当たり前のことに気づいたので、私は長編小説として出たばかりの『三里湾』という小説を卒論の対象とすることにした。

私の修士論文は、「趙樹理私論」であつたと思う。卒論の題名が「趙樹理試論」であつたので、「試論」が「私論」になつたと笑われた。そして、卒論の方が修論よりマシだとも言われた。修士論文の方は、確かに『三里湾』のモデルとなつた「山西省平順県川底村」の資料を『新華月報』一九五二年八月号より探し出してきたりして、裏付けはしっかりしたと思つた(「川底村郭玉恩農業生産合作社的組織制度和労働紀律」)。しかし、当時行なわれた人民公社についてのイメージが十分ではなかつた。趙樹理は人民公社の前段階の農業生産合作社に入るかどうかの決断で迷う農民たちの心理を描いているが、形態としての人民公社はともかくも、実態としての農民たちにある屈折した心理を、私は十分に捉えることができなかった。それは作品のテーマである合作社への加入が、登場人物を正面人物と反面人物に分け、その他の周辺の人々の「からかいの笑い」によって問題を解決に導くという構成によってなされることへの数々の疑問でもあつた。問題を善導する側の正面人物・王金生や王玉生よりも、范登高や馬多寿といった抵抗人物である反面人物の方がずっと面白く、魅力的であることが、文学としては合作社が成功するかどうかよりも、人物の形成が大事であることを証拠立てているような気がした。私がレトリックとして、せいぜい捉

えることができるとしたら、あだ名などの「からかいの笑い」の考察ぐらいであったといつてよかった。そういうわけで、内実としての文学意識の究明が不足していた。中国の農民作家と言われる趙樹理の論理とレトリックとを、如何に都会のひ弱な私が捉えるかという態度の問題に難点があったと思えた。

博士課程の後半の二回生から、大学紛争が起こり、授業などがなくなった。私はすでに結婚していたので、どうやって今後を生きていくか途方に暮れていた。そこに、中学高校一貫の学校への職の紹介があったので、研究職をやめてそこに勤めることにした。一九七〇(昭和四五)年四月のことである。

私の履歴はともかくも、中国との関わりだけについて言えば、私は『光明日報』を購読していた。もちろん船便で。職の方は、すぐさま学園紛争などがあつて忙しかった。このことに言及する暇は今はないが、幸か不幸か、この私がついた職には研究日というのが一週間に一日あつて、私はその日に中国語の非常勤講師として大学で教えていた。そういうわけで、語学の練習のためもあつて、私は時間があるときは『光明日報』を読んでいた。だが、正直なことを今になって言うのものはばかれるが、『光明日報』を通じて知る中国の教育革命に対して、私はどうもすつきりといつていけなかつた。文革の成果として次々と載せる記事を読んでも、しっくりこなかつたのである。そこで、私は、もう一度勉強しなおそうと、その頃出たばかりの、相浦杲『現代の中国文学』(三友ブックス、一九七二(昭和四七)年十月)を読んだ。この本は、近代、現代、当代と文学時期を三つに分け、一九四九年の中華人民共和国成立以後の当代文学を紹介するものであつたが、一八四〇年の阿片戦争から一九一四年の五四新文化運動直前までの近代文学や、五四新文化運動の一九一五年から中華人民共和国成立直前までの現代文学の流れや特徴についてもかなりの紙幅をさいていた。近代文学の父と言われる龔自珍から話が始まつて文革までの流れが書かれていた。私は学生時代に、私の下宿の近くにお住みであつた相浦先生のお宅まで伺つて教えを乞うたことがあるが、この

頃には交渉は切れていた。でも、この本を通じて、解放後の中国当代文学を、流れを通して学んだ。そして、そこに出てくる人名をカードに採った。かなりの人名カードが集まり、それがその後の私のカードの基礎となった。このカードで何かを書く助けとなったようなことはないのだけれど、このカード採りが、私のやり方の基本となっていることは確かだ。だから、相浦先生のこの本には感謝というか、大いに恩義を感じている。(それなのに、今の文章を書いてる時には、この本がどこに行ったか見当たらない)。

しかし、私に決定的に影響を与えたのは、竹内実先生の本であった。竹内先生の本はだいたい買って読んでいたが、中でも『現代中国の文学展開と論理』(研究社叢書、一九七二(昭和四七)年二月二九日、三六〇頁 + 「万象更新図」)に感銘した。一言で言えば、当時は文革中であつたが、文革のみならず、それ以前の日本では、中国からの雑誌新聞を読むことは限定されていた。資料が乏しく限られている中で、これほど突っ込んだ深い洞察ができるということを見事に教えてくれたのが、この本であつた。

解放後から文革までの二十年足らずの時間内にも、数々の動きがあつた。文学方面に限つて言つても、『武訓伝』批判、『紅樓夢』研究批判、胡適批判、胡風批判、百花齊放・百家争鳴、丁玲批判、反右派闘争、題材問題、中間人物論争など、かなりある。竹内先生がこういう動きをとらえるに際して使用した新聞雑誌は、『人民日報』『光明日報』『紅旗』『人民文学』『文芸報』などに過ぎない。これ以外には、批判の対象によつて、『收穫』『文匯報』『劇本』など数種が使われるに過ぎない。一見すると、かなりの資料収集が行われているように見えて、ほとんど上記五種の、基本的で、誰でも日本で購入できる資料が使われているに過ぎないのであつた。このことが私に、資料の多様性が問題ではないことを教えた。

与えられた資料の中でも、仔細に読み込むことで中国の文学的状况を知ることができるのである。このことを如

実に教えてくれたのが、竹内先生のこの本であった。例えば、文革における周揚批判については次のように述べていく。まず、『人民日報』に基づいて一九六七年五月の『文芸講話』二五周年記念大会での陳伯達と戚本禹の発言を取り上げ、毛沢東の解放以来の批判運動における発動・領導の役割を明らかにする（『人民日報』一九六七年五月二四日）。だが、その事實は、『紅旗』の一九六七年一期（また、『光明日報』一月三日）に姚文元によって明らかにされていたことを指摘する。さらに、毛沢東と党中央の領導について触れたのは、『紅旗』一九六六年一期（また、『文芸報』一期）によって周揚発言が先であったことに触れる。このように、最初に触れた発言は誰がどこでなしたのかを断定することに、一つの解明の方式を学んだ。

もちろん、周揚批判については、まだまだ続く竹内先生の考察があつて、それぞれの発言者の言葉を問題にするのである。毛沢東の発動・領導があつたという発言にどれだけの力がこもっているかを分析するのである。この言葉の一つ一つをゆるがせにしない究明に感銘した。詳細は述べないが、単純にまとめれば、解放後の十六年間で、「党中央と毛主席」が闘争を領導したと言うが、姚文元によって、「毛主席と党中央」と順序が入れ変わり、「毛主席」だけになるのが一九六七年五月の陳伯達と戚本禹の発言だと指摘される。そして一九六六年六月六日『解放軍報』掲載・『人民日報』転載の無署名論文で言う「われわれ」が、周揚がいう「われわれ」と対立することを指摘する。こういう竹内先生の分析によって、私は、同じ言葉を発言していても、時空の違いによっては効果が反対になり、発言者の態度がそれによって明確になることを学んだといつても良い。言葉といふか措辞の解明がいかに大切かを学んだといつても良い。

竹内実先生が京都大学人文科学研究所に移ってこられたのは、一九七五（昭和五〇）年四月のことであつたと思うが、一九七九（昭和五四）年四月に私は竹内研究班「現代中国」の非常勤講師に任ぜられた。私はその研究会で、中

国の作家や評論家などの文革中に死亡した人のリストを発表した。この発表は、のちに「文学者の死について」として『アジア・クォーターリー』第一二巻二・三合併号（一九八〇（昭和五五）年六月）に掲載されたが、竹内先生にすっかり書きなさいと激励されて書いた文章であった。

私は上述のように、『光明日報』をずっと購読していたが、『光明日報』ばかりでなく、文革終息前後に雑誌が復刊するに従い、かつての作家や評論家、詩人など文学者と言われる人の死亡記事と追悼の文章が目につくようになった。だいたい一九七八（昭和五三）年頃から新聞雑誌に掲載されるようになった。一九七九（昭和五四）年には、ちょうど日本語の専門家として北京にいた中島長文氏が、復活して出たばかりの地方の雑誌を私に送って見せてくれた（これらの雑誌は、中島氏が帰国してから京大人文研に寄贈された）。そういう雑誌や新聞などに載った文学者の死亡記事や追悼文を私はカードに採り、一覧表にしたのである。『光明日報』など、何の役にも立てていないから、何度も購読をやめようと思っていたのだが、思わぬことで役に立った。この一覧表の意義を認めて評価してくださったのが竹内先生であった。私が北京第二外国语学院に日本語教師として行くことになったとき、竹内先生は、一九七九年度の研究会の打ち上げとして鞍馬山で宴会を行なった。先生は、ちょうど四川大学の日本語教師として行くことになった森時彦夫妻と私の無事を、鞍馬神社で祈ってくれた。

なお、蛇足ながら付け足すと、この発表の付随的成果として、霞山会から『ひとびとの墓碑銘——文革犠牲者の追悼と中国文芸界のある状況』（竹内実・村田茂編、一九八三（昭和五三）年二月、三七七頁）が発行された。付随的というのは、発行されたとき私は北京にいて、いきさつを詳しく知らなかったからである。

私は、帰国後、現代中国の研究班を続けていた竹内先生の研究会に入れていただいたが、竹内実先生が京大人文研をおやめになってから、狭間直樹先生の研究班「一九二〇年代の研究」に入れていただいた。この間、私自身も

京都産業大学から三重大学、そして関西大学と職場を移った。一九八九(平成元年)六月四日に第二次天安門事件が起きた。私はその前から、何を研究したらよいか迷っていた。趙樹理については、一九八一(昭和五六)年の八月に彼の故郷・山西省沁水を訪ねて、「趙樹理の故居をたずねて」(大修館書店『中国語』一九八二(昭和五七)年一月号)を書いて、一応のケリをつけたと思っていた。次に何をしようか定まっていなかったときに第二次天安門事件が起きたのである。一九八九年の「六四」(第二次天安門事件)前後に、私は謝冰心という名前を香港の雑誌『明報』などで見た。冰心が政府に異議を申し出る文書に署名したというのであった。あの小柄な、品の良い顔の優しいおばあちゃんのイメージからして、どこにそのような熱い正義の息があるのだろうと気になった。謝冰心と言えば、児童文学の作家としてしか私は知らなかったが、少し読んでみようと思った。

私が驚いたことに、謝冰心は早くから日本で紹介されていて、何度も批判を受けていた。日本人からも、もちろん中国人からも、批判されていたのであるが、それでも、かなりの読者を持って、彼女は生き続けていた。私は、この秘密を知りたいと思った。

謝冰心は、『冰心全集』(卓如編、海峽出版社、一九九九年四月、全九巻豪華珍藏本。二〇一二年五月に新たな十巻本が同じ海峽出版社から出ている)を残しているが、その中の作品として、私は「寄小読者」が一番好きである。一般的には、児童文学と言われている「寄小読者」を読んでみると、最初は、アメリカに行く謝冰心が自分の知見を子供たちに手紙として書き送っているように見えたが、書かれている内容は、孤独と病と死に対する実感の独白であった。一人異国に行く少女の、こういう負の感慨と考察は、必然的に「生」の希求と相まっており、そこに深い人生の実感が描かれることになる。「生」の希求が「母の愛」「昇華してゆくのが、この手紙集(『散文』)なのであった。したがって、この文章には、子供を特に意識した不快な部分がなく、自らの「生」の希求としての包み隠

さない自己の姿が見られるのであった。その真摯な希求が、謝冰心の言葉として『母の愛』となって、人の心打つ文章となつているように、私は思う。だから、私には立派な大人向けの作品であるように思う。

もちろん、謝冰心には構成力の不足とか、社会性の広がりなさなど、欠点があるから、長編小説は作成していない。しかし、人にはそれぞれの得手不得手があるのであるから、謝冰心の生きるスタンスとして、自らの実感を可能な限りの美しい言葉で表現しようとする、その作品を私は愛する。あえて言えば、それはかなり強くて有効な文学の心ではないかと思うのである。

以上、私の『いくつかの本』について、書かせていただいた。「読書遍歴」などというものから外れた、いい気な回憶の文章になつてしまった。結論的に言えば、私には『この一冊』という本がなかった。それはある意味で寂しいことだが、『この一冊』よりも、『この作家』と対象を見つげることの方が有意義な気がしている。そろそろ紙幅が尽きる頃であるから、ここまででおしまいにしたい。

(はぎのしゅうじ・関西大学名誉教授)